

Title	臨床教育学講座2001年度授業科目一覧
Author(s)	
Citation	臨床教育人間学 (2002), 4: 131-134
Issue Date	2002-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/196983">http://hdl.handle.net/2433/196983</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 臨床教育学講座 2001 年度授業科目一覧

### ■臨床教育学研究（皇紀夫・矢野智司・皆藤章）

臨床教育学と教育人間学の基本的文献・古典的文献を精力的に読む。また、博士論文に向けての指導を行う。

### ■臨床教育人間学特論Ⅰ（森田尚人：中央大学教授）（集中講義）

〈教育研究における解釈的アプローチの思想史的系譜〉

この1世紀にわたる教育研究の歴史を概観することを通して、臨床教育学の方法論的基盤ともなっている教育についての解釈的アプローチが、どのように生み出されてきたかを検討する。

- (1) 世紀転換期に成立する「教育の科学」をデュルケムとデューイについてみるとともに、デュルタイの解釈学とプラグマティズムの思想史的関連を問い直す。
- (2) 機能主義とマルクス主義によって提起された教育と社会的機能についての理論はまったく対照的な結論をともなったが、解釈的アプローチと対比すると共通した科学方法論が見いだされることを論じる。
- (3) 精神分析に対する理論的態度をてがかりに、モダニズム・ポストモダニズムの論争を読みなおす。
- (4) 教育学や心理学において構成主義へと向かう最近の動きを、プラグマティズムの復権という動向のなかに位置づけて、解釈的アプローチの新たな可能性を考える。

### ■臨床教育学特論Ⅱ（皇紀夫）

Human sciences における Hermeneutical turn や Rhetorical turn が話題になっている。こうした言語研究の動向は、臨床教育学が、既成の教育諸学の枠組や連関などから「教育」を一度離脱させて、「教育」研究に新しい局面を開くために、有効な手がかりを与えようと思う。今年度は、臨床教育学の研究様式の探究を主題として、レトリック論、なかでもアリストテレスのそれについて考察していきたい。

**■臨床教育学演習Ⅰ（皇紀夫・皆藤章）**

皇：教育研究者が作り出した典型的な教育言説に注目してその語りの構造・様式・筋立てなどの分析をするとともに、さまざまなジャンルの人間に関する言説との対比において、言説間の類似性と差異性について検討する。

皆藤：〈人間とは何か〉に深く触れている、臨床心理学・心理療法・生命学など、人間に関するさまざまな領域の「語り」に接することをとおして、ふたたび「人間とは何か」をわれわれの問いとして引き受けることを試みる。素材は基本的に受講生が見出すことにする。

**■臨床教育学演習Ⅱ（矢野智司・田中每実：京都大学高等教育教授システム開発センター教授）**

後期は、教育人間学の古典的なテキストと人間学にたいする批判的テキストを、精力的に読み、教育人間学の今日での可能性について議論する。読むテキストについては、授業の最初に指定する。

**■学校臨床学演習（皇紀夫・皆藤章）**

学校臨床教育学の方法：

教育やカウンセリングあるいは学校や子どもや教師に関する最近の文献を読み討論し、日本の教育の病理的事象を意味づけている教育関係者や心理学者などの語りの文脈に注目していきたい。

また、学校で現に起きている「問題」や相談事例について現場からの話題提供を受けて、学校臨床教育学の可能性について共同調査研究したい。

受講希望者は、あらかじめ希望届けを出して、指示された文献についてレポートを提出すること（これらについては5月に提示する）。

**■臨床教育学課題演習Ⅰ（皇紀夫）**

臨床教育学、教育現場における実践、学校教育の動向を理解する文献を検討する。

この授業では、在職院生（2種）を主たる対象としたものである。そのため授業の形態と時間を変更する場合があるので、受講希望者は注意すること。

### ■臨床教育学課題演習Ⅱ（皆藤章）

- (1) 心理療法において使用されるアセスメント技法は、使用するという「意図」「行為」それ自体によって、すでに〈私〉という存在がコミットしている。したがって、もたらされた「結果」に向き合うときには、このことへの考慮がなければならない。アセスメント技法に客観性を求める流れのなかで、このことはしばしば忘れられてきたように思われる。それが、アセスメント技法の使用における浅薄な理解に繋がっていると考えられる。

主として以上の点について、アセスメント技法のなかでもとくに風景構成法やバウムテストなどの描画法を中心に、心理療法を基盤におきつつ実践的・体験的に考えていく。心理療法家は、作品から、イメージでもっていかに非言語的なメッセージを受け取っていくのだろうか。

- (2) 上記描画法を中心にして、アセスメント技法のブラインドアナリシスにかんするテーマについて考える。
- (3) 風景構成法からみた発達の理解について、豊富なデータをもとに検討を加える。

### ■子どもの人間学演習（矢野智司）

動物絵本の人間学：

ブルーナの絵本は、この世に生まれた子どもたちが初めて出会う絵本だ。しかし、なぜこの世で初めて出会う本の絵がウサギの絵なのだろうか。多くの絵本には動物が登場する。いや絵本の主人公は動物だといってもよいぐらいである。なぜこれほど動物が登場するのか。動物絵本は子どもにとってどのような意味があるのだろうか。この問いに答えるには、動物が人間にとって共同体の外部に位置づく不透過な「他者」であることを考える必要がある。絵本の動物は、子どもを共同体の外部（野生－生命－死）へと導く存在である。子どもを導く動物は、秘密の友達ウサギの「アルド」のように一枚のマフラーを巻くことによって、野生－他者性をコントロールして子どもの前に現れる。エッツ・バーニンガム・センダックらの動物絵本を手がかりに、子どもと動物と大人の関係について考えてみよう。そこから、幼児教育の可能性について考えてみよう。参加者は絵本を自分で解釈し発表することが課せられる。

#### 【参考文献】

矢野智司『自己変容という物語』金子書房、2000年。

### ■臨床教育学課題演習Ⅰ（皆藤章・大山泰宏）

心理療法の実践およびケーススタディに、心理療法家はみずからのイメージをいかに活性化させてコミットしていくのであろうか。〈個〉と〈個〉のかかわり合いを検討することによって、〈普遍的知〉へ到る道筋をいかに歩むのであろうか。

このような心理療法家の姿勢を磨き深めていくためには多種多様な経験が必要であるが、それらすべてに共通する基本について、さまざまな方向から実習を行う。具体的には、以下の二点を中心にする。

#### (1) ケースカンファレンスの基礎：

ケースカンファレンスは、事例研究法（ケースメソッド）である。この研究法の成否の前提は、「目の前にある事象から何をどのように読みとり記述するのか」にかかっていると言ってもよい。本演習では、したがって、事象の記述のための基礎をまず学ぶ。そのために、ビデオ映像の記述分析、KJ法などによる自分の視点や解釈枠へのリフレクションと気づき、五感を開かれたものにしていくための感性訓練などを行う。

#### (2) 「problem based」のケースカンファレンス：

ケースカンファレンスは、流れを辿る方法ばかりではない。実際に来談者を前にしたときに、どんな仮説を立て、どんな情報を聴いて、何をどんな順番で、どのように考えていくべきかといった、セラピストの実践的関わりに視点を置いてみていく「problem based」の方法がある。

本実習では、実際の事例の1、2回目に重点をおき、初期にどんなことが見立てられるのか、どんな関わりをすればよいのかなどの視点から、ケースについて考えていくことにしたい。